

最も有名な昭和の童謡歌手 河村順子さん

光陽の長女・順子さん(1925-2007)は5歳で初舞台に立ち、6歳でNHKに出演、戦前に170曲ものレコードを吹き込んだ、いわばアイドル歌手的な存在でした。昭和11年には「うれしいひなまつり」が大ヒット。以後、父・光陽が作曲した「りんごのひとりごと」「赤い帽子白い帽子」などがヒットし、特に「かもめの水兵さん」は、戦前・戦中の童謡で最大の売上を記録しています。順子さんは音大を卒業後、NHKの「歌のお姉さん」としてレギュラー出演する傍ら、各社で童謡をレコーディング。欧州留学後、大学の教壇にも立ちました。昭和60年に日本童謡賞特別賞を受賞。平成元年には累計レコード売上が1千万枚以上に達し、57年もの間童謡をレコーディングした歌手として、ギネスブックに登録されました。



←平成7年、メキシコシティで日本メキシコ学院の幼稚園児たちと河村順子さん(左)

やがて光陽は、子どもの実生活をうたった詩人・武内俊子やサトウハチローらと出会い、美しい詩を日本旋律にのせていきます。昭和11年、38歳で小学校を退職し、キングレコードと専属契約。この時、本名の「直則」から「光陽」と改名したことからも、作曲家としての彼の意気込みがうかがえます。昭和15年には富山放送局の依頼で、順子が歌唱、陽子がピアノ、博子がバイオリンという編成のファミリーコンサートを開催。ラジオでも放送されました。



↑東京都駒込吉祥寺の河村家墓地にある童謡一路の碑。

戦後、さまざまな制約もなくなり、いつその活躍が期待されていた河村光陽。しかしそんな矢先、光陽は49歳で突然この世を去ります。昭和21年12月24日、枕元にはNHKに納曲予定の4本がおかれていました。光陽が駆け抜けた20年間にわたる「童謡一路」の道。夢を追い、音楽を追求し、独自の感性と望郷の思いをのせた輝かしい旋律の数々は、時を経た今も決して色あせることはありません。

河村光陽童謡ファイル③

♪かもめの水兵さん

作詞者・武内俊子が横浜港でハワイに発つ叔父を見送ったのは昭和8年9月、秋晴れの午後のこと。武内はその印象を帰りの電車で詩に書きとめ、電話で光陽に作曲を依頼しました。題名は「かもめの水兵さん」。光陽はすぐにピアノを弾き、その日のうちに曲を完成させたといえます。今では10か国語以上で歌われ、国際的な歌として位置づけられる名曲です。光陽の作曲で数々の名作を生んだ武内は、昭和20年に39歳で死去。光陽も翌年この世を去ります。当時、武内は女性の社会進出が困難だった昭和初期に、4人の育児と作詞を両立させた詩人。授乳しながら詩のアイデアを書きとめたといわれています。



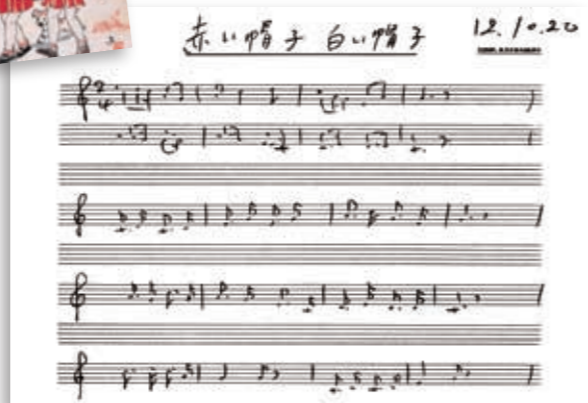
←光陽と同じ碑文で広島県三原市に立つ武内俊子の童謡碑。

二女 河村陽子さん Youko Kawamura

「父」は、自宅で倒れてから亡くなるまでの数日間も、枕元に年末放送予定のNHK用譜面を置いていました。父の曲には日本的な音楽の要素が取り入れられています。その感性をはぐくんだのが古里の風土です。今回の除幕式に参加させていただき、東京から福智町を訪れましたが、すばらしい山や川の情景が父の童謡の根底にあるのだと、改めて実感しました。」



昭和12年、子どもが友だちと一緒に通学する姿や成長の喜びを歌にした「赤い帽子白い帽子」。「キングレコード童謡名作選」の歌詞④と光陽直筆の楽譜⑤



大正13年、帰国した光陽は、27歳で岡部都根美と結婚。その年に山田耕筈らによる日本初のシンフォニーオーケストラ「新交響楽団」が結成されることを知ります。光陽はバイオリン奏者に応じようと上京。しかし募集は終了していました。奏者を断念した光陽は、研究のため東京音楽学校(現・東京芸術大学)専科で、日本を代表する音楽家から音楽理論を学びます。また、中田章(和



→河村光陽と順子(中央)昭和7年、ポッポの会。

童謡の世界へと導いて行きます。昭和2年に二女・陽子が誕生。昭和3年からは自宅でバイオリンと歌を教え、翌年からは竹早小学校(東京)で音楽教師を務める傍ら、多くの楽曲を発表していきます。この年に三女・博子が誕生。次第にNHK出演やレコードの吹き込みなどで多忙な日々を送るようになります。

一路への道

光陽の童謡作曲家としての初作品は、長女・順子が生まれた翌年、大正15年11月に発表された「うれしいさ」(作詞・佐藤義美)。この曲から1千曲以上を作曲する光陽の「童謡一路」の道がスタートしました。

声)、榎原直(ピアノ)、藤井清水(作曲)、大沼哲(管弦楽法)らの自宅で個人指導を受けながら、本格的基礎を学習。作曲家としての礎を固め、活動を始めました。

運命の岐路

故郷の教壇で子どもたちに音楽のすばらしさを伝える河村光陽。その日々の中で、音楽が持つ魅力を実感しながら、胸に抱いていた音楽家としての夢も膨らんでいきました。

光陽の胸中にあった断ちがたい目標、それはヨーロッパでの音楽研究を視野に、モスクワでロシア国民楽派の音楽を学ぶことでした。

大正9年、光陽は音楽家として志を果たすことを決意し、金田尋常小学校を退職。単身で朝鮮に渡りました。しかし、幸か不幸か、国際情勢の変化で光陽のモスクワ行きは閉ざされてしまいます。光陽がもし、シベリア鉄道に乗り、ロシアに行っていたら：国民楽派の音楽に刺激され、管弦楽曲への道をまっしぐらに進んでいたかも知れません。立ちほだかった時代の壁が運命の分岐点となり、のちに光陽を童謡の世界へと導いて行きます。

故郷に宿る大志の残響

夢一路に

夢を追い求め、愛する故郷をあとにして日本の童謡界の先頭を走った河村光陽。この町に刻まれたその志と旋律は、今も色あせることはありません。

→昭和41年に建立され、天郷青年の家の跡地から「協奏の庭」に移設された記念碑。背面には光陽をたえる碑文が刻まれている。平成19年に文化庁が全国公募した「親子で歌いごう 日本の歌百選」では、光陽作曲の「かもめの水兵さん」と「うれしいひなまつり」の2曲が、後世に残したい名曲として選ばれている。

